

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 日本・東アジア文化学領域
氏名 葉 斐

【論文題目】 村上春樹小説研究—その作品の深層と二〇〇〇年代—

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、現在国際的に最も著名な日本人作家の一人である村上春樹による 2000 年代以降の小説を考察の対象として、その小説の構造を「語り」(narrative) の技法から分析し、同時期の村上作品における単一視点による一人称形式から複数視点による三人称形式への転換に代表される語りの技法の顕著な変化を踏まえて、その変化の背景に存在した村上文学の描くテーマ自体の変化を検討した論考である。

本論文全体は、序論、四章からなる本論、そして結論を含めた全六章から構成されている。序論では、村上春樹の小説を分析する際の語りの観点の持つ重要性を提起した上で、村上の初期作品（通称「初期三部作」など）から 1990 年代前期（『ねじまき鳥クロニクル』など）に至る主要作品における語りの技法を概観し、一見平明に見えて内実は錯綜した構造を持つ村上作品を解明する上で、語りの観点からの分析が不可欠であると指摘する。この語りの分析の有効性の確認を承けて、2000 年代以降の村上作品における語りの技法の変化がその作品テーマ自体の変化に対応していること、そしてそのような村上作品の深層の変化を探求することの重要性を提示する。本論では、2000 年以後の村上による一連の小説群の中から、第一章は、短編集『神の子どもたちはみな踊る』（2000 年）を対象に、その三人称語りを通して、二つの異質な暴力の表象（地震という自然の暴力と人間の暴力）の持つ性格を論じる。第二章は、『海辺のカフカ』（2002 年）について、この一人称語りと三人称語り各章毎に交錯する小説が、同じく多様な暴力（歴史的暴力としての戦争や個人・家族間の暴力）を対象化した作品であると考察する。第三章は、『アフターダーク』（2004 年）を対象に、カメラ・アイ的な一人称複数の語り手（私たち）が登場するこの作品が人間の暴力性の諸相を描くことを、河合隼雄の論を援用して分析する。第四章は、短編集『東京奇譚集』（2005 年）について、主に三人称語りに基づくこの作品群が、「奇譚」を軸に家族関係とその心理的葛藤を共通テーマとして内包すると評価する。結論では、村上作品における新たな語りの技法とテーマの導入の背景にある作家的な要因として、1995 年の阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件の発生を提示し、それらの社会的事件が村上に与えた 1990 年代末の深刻な内省が、村上の小説を方法的にも内容的にも変化させたことと評価する。そして、2000 年代以降の村上による一連の小説群が、それ以前の一人称中心の方法では十分に描けなかった暴力や葛藤などの共通した同時代的な課題（他にも家族関係・境界の表象・個人の内面）を、複数の三人称語りによる方法を通して表現したという結論を導出している。

本論文の示す新知見と獨創性は、以下の三点に要約される。第一に、語りの技法という分析上の視点の設定を通して、2000 年代以降の村上による一連の作品群についての新たな統合的な評価を試みたこと。語りの観点からの村上小説の分析は理論的精緻化の余地を残すが、今後の発展の可能性は大きい。第二に、先行研究が比較的手薄な 2000 年代前期の村上の短編集について分析し、この時期の村上の作品史の内部に明確に位置づけたこと。それらの短編集と同時期の長編との関係性の分析は示唆に

富み、今後の研究に対して有益である。第三に、各章での村上の個別テキストに関する分析は独創的な論点を多く含み、従来指摘がない多くの解釈を示す。例えば、第4章の甲村図書館という空間の一連の分析は新見である。

以上の通り、本論文は、村上春樹の小説を中心とする日本の現代文学の研究において新たな知見と展望をもたらすものであり、博士（文学）の学位にふさわしいと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

学位論文申請者は、平成27年1月26日（月）に実施した口頭試問において、博士学位論文の内容に対する審査委員の質疑に対して、適切な応答を行った。

また平成27年1月31日（土）に開催された学位論文発表会において、博士学位論文の主旨についての的確な発表を行い、これに対する質疑に対しても適切に応答した。

これらにより、当該研究テーマについての博士の学位にふさわしい学力及び関連領域に関して十分な知識を備えていることが確認された。学位論文審査の結果とあわせて、申請者に博士（文学）の学位を授与することができると判断する。

【審査委員会】

主査 坂元 昌樹
委員 西槇 偉
委員 屋敷 信晴
委員 竹島 一希
委員 福澤 清
委員 森 正人